

## 教養科目「心理学」の講義内容に関する検討

吉村智恵子・望月久乃

### An Examination at the Contents of a Psychology Class in the Liberal Arts Department

Chieko YOSHIMURA and Hisano MOCHIZUKI

#### はじめに

大学設置基準の大綱化により、一般教育科目を始めとする教育課程の見直しがすすめられて、はや数年が経った。心理学の概論あるいは入門程度の講義は、多くの大学で教養科目として開講されてきているが、「開講されて当たり前」と見るのではなく、この科目を開講する意味を再度見直す必要がある。名古屋女子大学でも、文学部・家政学部・短期大学部において開講されている。「心理学」は、高等学校卒業までの教育課程には、同様の名称の教科は設置されておらず、学生にとっては新しい科目である。筆者は、現在短期大学部に開設されている教養科目「心のはたらき」(半期・講義)を担当している。選択科目であるが常に80%を越える1年生が履修し、このような状況は、学部での教養科目「心のしくみ」(半期・講義)、「心の展開」(半期・講義)においても同様であり、短期大学部あるいは学部の1年生のほとんどが「心理学」を学ぶということになる。この高い履修率の中には、1年生入学時の選択ということから、講義内容等について先輩の話やシラバス(授業概要)に示されている内容を確認するということなく、どのような学問であるのかもわからないままに履修している学生が多数いるはずである。このような危惧を抱くのは、学生は入学までに「心理学」あるいは「心」という言葉の入った授業を受けた経験がないはずだからである。「好きだから」とか「さらに積み重ねたい」ではなく、未知の分野に接していこうとしていると考えられる。逆に、高校卒業までに設定されている教科として学んだ領域よりも、何か新しいことを学びたい、という動機や、「心」を取り扱う学問に対する関心の強さなどが関わっているのかもしれない。むしろ、「心」という名称にのみ惹かれて選択しているのかもしれない。

一方では、学生は「心理学」の内容として意識しないままに、中学・高校時代に既に学んでいる事項もあるはずである。大学教員自身も学生がどのような学習をしてきているか知らないままに、まったく新しい分野の事柄を教授しているつもりで講義を行っている場合がある。

また、「心理学」には、単に「心理学」の学問的知識を伝えるのみでなく、青年期の心の課題についての考察を深めるサポートとなる可能性もある。学生の既有知識や科目に対する要求、講義の現状等について吟味し整理した上で、講義内容を検討することが必要である。

多くの学生が履修する科目であるが、できるだけその要求に応える内容を用意すると同時に、要求のみに迎合しない教育目標を明らかにしていくことを課題として、「心理学」の講義について検討したい。

検討には、①学生の履修動機と心理学に対するイメージ ②入学までの心理学に関する学習

機会 ③一般的に扱われている心理学の講義内容 ④10,11年度受講生の自我同一性地位 の4点に関する資料を用いる。

### 1. 学生の履修動機と心理学に対するイメージ

学生はどのような動機で「心理学」を履修しようとしているのか、または、心理学をどのような学問と考えて学ぼうとし、心理学に何を期待しているかについて意識調査を行った。

Figure 1は、「心のはたらき」受講生（短期大学部1年生267名）を対象として、授業開始時に、授業の中で扱うことが可能な内容をいくつか挙げて、「あなたはなぜ『心のはたらき』の授業を受講しようと思いましたか。あてはまるものにいくつでも○をつけて下さい」という質問で行ったアンケートの結果である。

Table1は受講前と受講後の意識の変化を見ることによって、学生は心理学に対して何を期待して受講しようとしているのか、受講により心理学をどのように理解し直しているかを見るために「心のしくみ」受講生（文学部1年生155名）を対象として意識調査を行った結果である。この調査は藤本ら(1993)に従って、「あなたが心理学に対して抱いているイメージは？」と質問し、各問いに対して5点尺度での回答を求めた。「肯定」を5点、「否定」を1点とし、受講前と後の平均値の変化をTable1に示した。

履修動機については、Figure1に示す結果から、学生は「自分」「他の人」について「理解」したいと第一に考えて履修しており、次に「真理」「ものの存在」など、客観的に対象を見ることを学んだり「友人」「自分の行動」について考えようとしていることがわかる。「人」についてわかりたいということが第一であり、中でも他人より自分を理解したいことに主眼が置かれている。また、「ただ何となく」という者が約4分の1近くみられるが、「履修したい科目が他にない」というのはごく僅かであり、履修動機としては、やや積極的であるといえる。また、Table1の結果から、「1. 心理学に興味がある」(4.41)「2. 心理テストに興味がある」(4.55)の値が高く、履修する際に高い関心を持って履修を開始し、受講後もその関心は維持されていることがわかる。

次に、心理学に対して抱いているイメージについて、Table1より、個々の問いに対する回答の変化をみる。

#### ①受講前肯定的で、受講後肯定イメージが強まった項目

受講前肯定的であった「4. 心理学は役に立つ」(3.90)、「5. 心理学は科学的である」(3.15)と「12. 心理学を学べば自分の心がわかるようになる」(3.32)は、受講後肯定的なイメージを強めており、特に「5. 心理学は科学的である」は、0.31ポイント上昇しており、大きく変化している。

#### ②受講前肯定的で、受講後肯定イメージ弱まった項目

「3. 心理学は神秘的である」(3.67)と「6. 心理学は文系である」(3.24)は、肯定イメージは、そのままであるが、それぞれ0.38、0.20ポイントずつ下降し、肯定的イメージが弱まっている。また、「7. 血液型で性格が分かる」は、心理学と結びついた学問的根拠を想像させる内容であるが、受講後の値は下がっている。

#### ③受講前肯定的で、受講後否定イメージへと変化した項目

「8. 心理学は占いと関係が深い」が肯定傾向(3.12)から否定傾向(2.70)へと大きく(0.42ポイント)変化している。

Table 1 教養「心理学」の受講前と受講後の心理学に対するイメージの変化

(女子大学生 155名)

質問項目	受講前	受講後	変化
1. 心理学に興味がある	4.41	4.46	↑
2. 心理テストに興味がある	4.55	4.65	↑
3. 心理学は神秘的である	3.67	3.29	↓
4. 心理学は役に立つ	3.90	3.93	↑
5. 心理学は科学的である	3.15	3.46	↑
6. 心理学は文系である	3.24	3.04	↓
7. 血液型で性格がわかる	3.67	3.52	↓
8. 心理学は占いと関係が深い	3.12	2.70	↓
9. 頭の良し悪しは知能テストでわかる	2.43	2.49	↑
10. 心理学を学べば、人の心を読めるようになる	2.61	2.82	↑
11. 心理学を学べば相手の性格がわかるようになる	2.82	3.08	↑
12. 心理学を学べば自分の心がわかるようになる	3.32	3.52	↑
13. 心理学を学べば、自分の悩みが解決できる	2.71	3.00	↑
14. 心理学を学べば、人づきあいがうまくなれる	2.86	3.09	↑
15. 心理学を学べば、異性にもてる方法がわかる	2.35	2.43	↑

(数値は平均値、変化：↑は上昇、↓は低下)

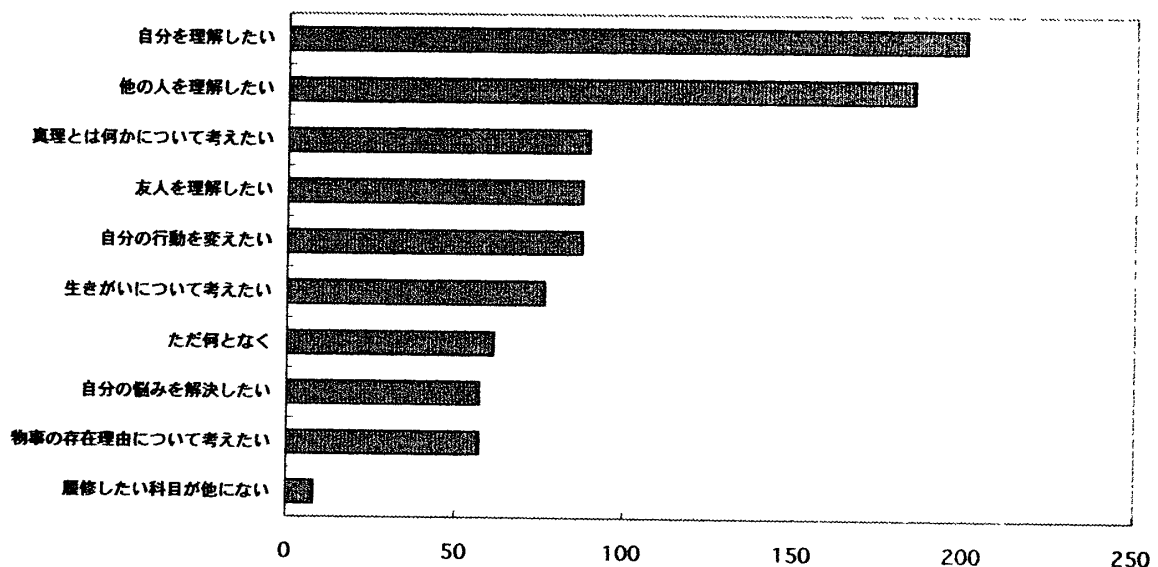


Figure 1 「心のはたらき」受講動機 (人)

④受講前否定的で、受講後肯定イメージへと変化した項目

「11. 心理学を学べば相手の性格がわかるようになる」(2.82)「14. 心理学を学べば人づきあいがうまくなれる」(2.86)「13. 心理学を学べば自分の悩みが解決できる」(2.71)は、否定傾向から中間又はやや肯定傾向に変化している。

⑤受講前否定的で、受講後否定イメージが弱まった項目

「10. 心理学を学べば人の心を読めるようになる」(2.61)は、0.21ポイント上昇し、否定傾向が弱まっている。「9. 頭の良し悪しは知能テストでわかる」(2.43)「15. 心理学を学べば異性にもてる方法がわかる」(2.35)は、それぞれ0.06、0.08ポイント上昇し、やや否定傾向が弱まっている。

⑥受講前から受講後への変化について

調査結果からは特に、「心理学は科学的である」の平均値が0.31肯定的な方向へと変化したのに対して、「心理学は占いと関係が深い」が0.41ポイント、「心理学は神秘的である」が0.38ポイントほど否定的な方向に変化している点に注目することができる。科学的な根拠に基づいて心理学の理論等を学ぶことによって、心理学を「神秘的」「占いと関係が深い」といったイメージとは引き離す結果になっている。また、「心理学を学べば・・・」の問いの中で「自分の悩みが解決できる」+0.29、「相手の性格がわかるようになる」+0.26、「人づきあいがうまくなれる」+0.23、「自分の心がわかるようになる」+0.20と値が上昇し、いずれも肯定的傾向になっている。「占い」との関係は、一般に行われている心理テストと混ざったイメージにより心理学に対して抱かれていたもののように考えられるが、「心理学を学べば・・・」の項目での回答と合わせてみると「占いの」な心理テストではなく「科学的」根拠に基づいて「自分」や「他者」についての理解ができる学問であるという意識へと変化していることがわかる。

以上のことは、調査時に自分自身の受講前と受講後の「心理学に対するイメージ」の変化について、学生に考察、記述させたものからも資料を得ることができる。

主なものを下記に示す。

<「心理学は科学的である」に関連して>

- ・心理学とは実験や統計に裏付けされた、基盤のしっかりした学問。
- ・心理学は厳密性と正確性を追求する科学的な要素がとても重視されている。
- ・心理学はとても実証的で科学的である。
- ・心理学に対する興味が薄れた。理系のようにおもえたことによって、文系の私はずっとつまらなく感じた。神秘的であると思っていたのに、そうではないので残念。

受講前に見えない人間の心を解明し、人の心がわかる、読めるといった神秘的で占術的なものと「心理学」を捉えていたが、講義で学問の歴史・総説から立証された各理論の説明を受けたことで、科学的な面が強くなったと考えられる。

<「心理学は文系である」に関連して>

- ・心理学が科学的であるかないかや、文系や理系かについては、対象が人間ということもあり私には少し難しくどちらかとはいえません。ただ、私は「どちらでもない」ではなく「どちらでもある」というほうがあてはまるかなと思いました。
- ・心理学は文系か理系かひとつ奥の迷路に進んだような気分です。
- ・心理学とは生きている人間のいつも変化のある心について学ぶものであり、興味深い。
- ・心理学はとにかく未知の世界。
- ・心理学は奥が深く、難しい。

- ・何でも人間の行動が心理学的に説明されるようになったら恐ろしいし、人間的でなくなるのが淋しい。

「心理学」の学問の対象が人間ということから、興味はあるが、実際には解明しにくい「心」をもつ人間の行動に定義付けをしていくような「心理学」という学問に考えさせられたという意見もみられた。

<全体的な変化について>

- ・心理学とは日常生活にも深いつながりがある。
- ・心の動きを客観的にみられることが増えました。
- ・自分を客観的に見つめるというきっかけを与えてもらってとても勉強になった。
- ・心理状態が健康にも大きく影響していることを学んだ。自分が何かの原因で心理的に参った時も自分の中で解決できるコツが少し見えてきた。
- ・たくさんのストレスが自分に大きな影響を与えているならば、色々なことをしてストレスを軽くもってこれるのではないか。
- ・考え方のベースとして身につけておくと良い。
- ・学ぶ前と後では自分というものが少し変わったように思う。自分自身を知ることができた。

など、心理学の受講は自分自身についての内面を見つめ直すようなことにつながっていったと考えられた。

- ・心理学を学んだからといって人間の全てがわかるわけではありませんが、少なくとも人間を知る手がかりになる。
- ・心理学を学べば人の心が全てわかるとうわけではないけれど、人の気持ちや相手の立場になって考えるときに、ただ漠然と考えるのではなく「心」というものを手がかりに考えたら糸口がつかめると思う。
- ・人の心というものは複雑なものだと思いました。しかし、少しでも理解することが心理学を通してできると思いました。
- ・人の気持ちを考えるようになりました。
- ・心理学とは人の心を開き悩みに答えられる力をつけるばかりでなく、人の心の変化を受けとめ、理解できる力を身につけること、他人や自分が考えている人の変化を広い目で対応する力を身につけることではないか。
- ・人の心を読むのではなく、その人と共感できるような自分でありたいし、友達関係をくっつけていきたい。
- ・心理学という視点から物事を見るのはとても興味深いものだと思うようになりました。

というように受講後には、日常生活あるいは自分の周りに存在する人間についての見方、考え方にも影響を与えたと思われる以上のようなコメントがみられた。

青年期にある学生が、自己を見つめる機会を得たことがこれらのコメントから推察できる。

## 2. 入学までの心理学に関する学習機会

学生たちは、高校までの学校教育の中で何らかの形で心理学の内容に触れてきているのではないか。個々の環境によって、情報の種類・量は様々と考えられるが共通項と考えられる学校教育の中で触れてきているものを取り出してみた。国語や理科などの教科の中でも文章中や科学的思考の一環として関連事項を学ぶ場合もあるが、ここでは心理学で取り扱ってきた知見が、

Table 2 学習指導要領 抜粋

(アンダーラインは筆者)

u003c/pu003e

科目	内容	内容の取り扱い
小5・6 小学校	<p>〔保健〕</p> <p>(2) 心の発達及び不安、悩みへの対処の仕方について理解できるようにする。</p> <p>ア) 心は、いろいろな生活経験を通して、年齢とともに発達すること。</p> <p>イ) 心と体は密接な関係にあり互いに影響し合うこと。</p> <p>ウ) 不安や悩みへの対処には、大人や友達に相談する、仲間と遊ぶ、運動するなどいろいろな方法があること。</p>	<p>第5学年で指導するものとする。</p> <p>積極的な学習が行われるよう適切な時期に、ある程度まとまった時間を配当すること。</p>
中 学 校	<p>〔家庭分野〕 B 家族と家庭生活</p> <p>(2) 幼児の発達と家族について、次の事項を指導する。</p> <p>ア) 幼児の観察や遊び道具の製作を通して、幼児の遊びの意義について考えること。</p> <p>イ) 幼児の心身の発達の特徴を知り、子どもが育つ環境としての家族の役割について考えること。</p> <p>(5) 幼児の生活と幼児との触れ合いについて、次の事項を指導する。</p> <p>イ) 幼児の心身の発達を考え、幼児との触れ合いやかかわり方の工夫ができること。</p>	<p>(2) 幼児期における基本的な生活習慣の形成の重要性について扱うこと。</p> <p>(5) 幼稚園や保育所等で幼児との触れ合いができるように留意すること。</p>
保 健 体 育	<p>〔保健分野〕</p> <p>(1) 心身の機能の発達と心の健康について理解できるようにする。</p> <p>ア) 心身の機能は年齢とともに発達すること。生涯にかかわる機能が成熟すること。</p> <p>イ) 思春期には、内分泌の働きによって生じた適切な行動が必要となること。</p> <p>ウ) また、こううした変化に対応した適切な行動が必要となること。また、知的機能、情意機能、社会性などの精神機能は、生活経験などを受けて発達すること。また、思春期においては自己の認識が深まり、自己形成がなされること。</p> <p>エ) 心の健康を保つには、欲求やストレスへの対処の仕方に応じて、精神的、身体的に様々な影響が生じることがあること。</p>	<p>ア) 身体機能の発達の順序性及び呼吸器、循環器を中心に取り扱うものとする。</p> <p>イ) 妊娠や出産が可能となるような成熟が始まるという観点から、受精・妊娠までの取り扱うものとし、妊娠の経過は取り扱わないものとする。また、生殖に関わる機能の成熟に伴い、性衝動が生じたとき、異性への関心が高まることなどから、異性への尊重、情報への適切な対処や行動の選択が必要となることについて取り扱うものとする。</p> <p>エ) 体育分野の内容の「体づくり運動」の指導との関連を図って指導するものとする。</p>
家 庭	<p>〔家庭総合〕</p> <p>ア) 人の一生と家族・家庭発達課題</p> <p>イ) 生涯発達の視点で各ライフステージの特徴と課題について理解させ、青年期の課題である自立や男女の平等と相互の協力などについて認識させる。</p> <p>ウ) 家族と生活意義・家族・家庭と社会とのかかわり、男女が協力して家庭を築くことの重要性について認識させる。</p> <p>エ) 生活設計</p> <p>ウ) 青年期の課題を踏まえ、生活設計の立案を通して、自己の生き方や将来の家庭生活の在り方について考えさせる。</p>	<p>(1) ウ)については、ア)、イ) (2)「子どももの発達と保育・福祉」及び(3)「高齢者の生活と福祉」の内容との関連を図るとともに、(1)から(5)までの学習の中で段階的に扱ったり、「家庭総合」の学習のまとめとして扱うなどの工夫をすること。</p>
保 健 体 育	<p>〔保健〕</p> <p>(1) 現代社会と健康</p> <p>ウ) 精神の健康</p> <p>イ) 人間の欲求と適応機制には様々な種類があること及び精神と身体には密接な関連があること。また、精神の健康を保持増進するためには、欲求やストレスに適切に対処するとともに、自己実現を図るよう努力していくことが重要であること。</p>	<p>大脳の機能、神経系、及び内分泌系の機能について必要に応じ関連付けて扱う程度とする。また、「体育」における体ほぐし運動との関連を図るように配慮するものとする。</p>
公 民	<p>〔倫理〕</p> <p>(1) 青年期の課題と人間としての在り方</p> <p>ア) 青年期の課題と自己形成</p> <p>イ) 自らの体験や悩みを振り返ることを通して、青年期の意義と課題を理解させ、豊かな自己形成に向けて、他者と共に射切る自己の生き方について考えさせる。</p>	<p>この科目の導入としての性格をもつものであることであることによる留置し、生徒自身の課題とかかわらせて考えさせ、以後の学習への意欲を喚起すること。</p>

そのまま扱われている項目を見出すことのできた教科に限り、小学校高学年以上について整理してみた。(Table 2)

保健では、その学習者の年齢に応じた心身の機能の発達に関する事項、心の健康に関する事項がそれぞれの時期に示されている。家庭科では、家族と家庭生活に関わって、幼児の心身の発達の特徴や生涯発達の視点からの発達課題について触れている。特に青年期の課題と自己形成については、高校の倫理の中で扱われている。その他、教科書を見ると欲求、防衛機制、心の健康の問題などがかなり詳しく取り扱われているものもある。これらの内容を、「心理学」を講義する教員側はあまり把握せず、既習知識はないものとして、導入部分から講義している場合が多いと考えられるし、学生の側も、既に心理学に触れていることに気づいていないままに大学での講義に臨んでいるのではないかと考えられる。

これらの既習知識の上に積み重ねていくような内容の設定を考慮しなければならない。

### 3. 一般的に扱われている心理学の講義内容

講義内容を検討する上で、一般的に大学・短期大学で教養科目としての「心理学」がどのような内容であるかを知る必要がある。教授方法については、学生の現状に即して様々の工夫がなされつつある(加知ら、1999)が、内容についてはどうであろうか。

ここでは、一般教養向けのテキストとして販売されているもの35冊を資料として概観し、その内容を分類してみた。(Table 3)

各テキストの特色を出す意味あるいは著者の専門分野に応じて、ごく一部のテキストに採用されている特別な領域ではなく、全体の約7割(22冊)以上のテキストに掲載されている領域は、「感覚・知覚」(34冊)「人格」(33冊)「社会」(31冊)「学習」(30冊)「感情・情動・動機づけ」(25冊)「発達」(25冊)「臨床・障害」(25冊)「記憶」(23冊)であった。これらの領域が心理学の講義で主に扱われている内容といえることができる。また、筆者の手元にある約40年前のテキストを見ると、その目次には「序論」「第1章 知覚」「第2章 人と行動」「第3章 記憶」「第4章 学習」「第5章 パーソナリティ」「第6章 発達」「第7章 社会と集団」(阿部、1960)や「序論 心理学とは何か」「第1章 精神構造—人格」「第2章 精神機能—行動」「第3章 精神発達」「第4章 社会生活」(矢田部、1962)といったものがある。これらと現在のテキストで異なる点を見ると、各領域内での細かな内容の変化は数多く見られるのは、年月を経る間に得られた知見に応じて当然のことであるが、「臨床・障害」の領域が以前のものではなく、現在のテキストには約7割に掲載されているという点である。概論書あるいは入門的な内容を扱うテキストに、以前は応用の分野として取り入れられなかった「臨床・障害」の領域を現在は基本的な心理学の知識として取り入れる必要があるという考えが増加していることを示している。

### 4. 平成10,11年度受講生の自我同一性地位

平成10年度から「心のはたらき」の講義内容の中心に「自己理解」をおき、学生個々が心理学的知見を自分に当てはめながら、心を見つめる作業を行うようにしている。

知覚・記憶・学習などの中心的な課題を、自分自身のワークを通して事象の不思議さを客観的に理解する機会としていくこと、パーソナリティ・発達等について自分に当てはめながら考察を深めていくような演習を行うことを組み込んだ。

その中で、青年期の中心的課題である自我同一性の問題についてはやや多めに時間をかけて

Table 3 領域別、教養科目「心理学」テキストの内容

領域	項目数	項目名 (数字は同名「項目」の掲載テキスト冊数)
感覚・知覚・認知	35	「知覚」：8 「感覚」：4 「環境の認知」：2 「認知」：1 他
人格	33	「性格」：6 「人格」：4 他
社会・文化	31	「社会」：4 「社会心理(学)」：3 「社会的行動」：3 他
学習	30	「学習」：16 他
原理・方法・歴史	28	「心理学とは何か」：7 「心理学の歴史」：4 他
臨床	25	「臨床」：2 「適応」：2 他
感情・情動・動機づけ	25	「感情」：2 「情動」：2 「動機づけ」：9 他
発達	25	「発達」：9 「発達心理学」：2 他
記憶	23	「記憶」：7 他
言語・思考	22	「言語」：4 「思考」：5 他
知能	17	「知能」：10 他
行動	13	「行動」：1 他
数理・統計	10	「心理学的統計法」：1 他
産業・交通	5	「産業と経営」：1 他
犯罪・非行	4	「犯罪と飛行」：1 他
教育	3	「学習指導」：1 他
生理	3	「行動の生理的基礎」 他
その他	3	「人間工学」「環境心理学」「マンマシンシステムの心理」
スポーツ・健康	1	「健康心理学」：1 他

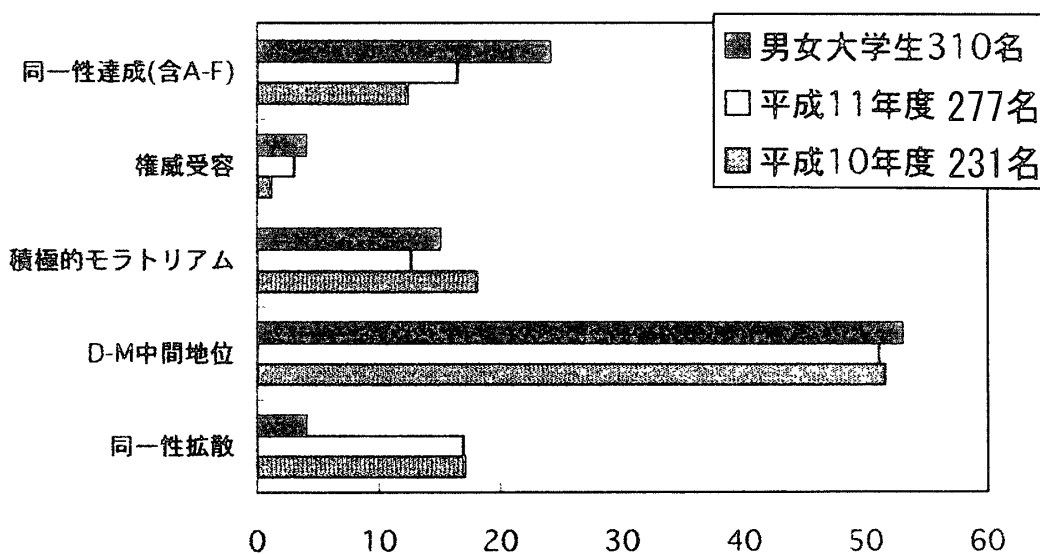


Figure2 各同一性地位の分布 (%)



取り組み、各自の自我同一性地位を確認することも、自我同一性尺度測定（加藤、1983）を用いて行った。学生自身の結果整理によって自我同一性地位を決定したものを集計した結果はFigure2に示すとおりである。2年間にわたって検査を実施したが、兩年共に同様の傾向の結果が出ていることがわかる。この結果は短期大学の1年生の傾向といえる。これを一般的な大学生の結果と比較してみると同一性達成が数パーセント低く、同一性拡散が数パーセント高い結果といえることができる。この測定では同一性拡散について「過去の危機」については不問とし、現在及び将来の自己投入の希求の低さを問い、同一性拡散としている。自己の可能性や様々な選択ということについて未だ曖昧な状態になっている学生の割合がやや高いということになる。同一性達成にむけて、自己に問いかけること、どう見極めるかなどをサポートしていく必要がある。

## 5. 講義内容の検討

前述の1から4の資料に基づいて、今後の教養科目としての「心理学」の講義内容を検討する。

まず、学生が心理学の講義に期待する内容には、「自分についてわかる」「他者についてわかる」ことが示された。また、従来の講義を通して、心理学の科学的側面に気づいていることも明らかとなり、知覚・学習・記憶など「人」が環境と相互に作用する中でシステムとして機能している心の側面を理解することを基礎として、占いや巷の心理テストで即座に「自分」がわかるのではなく、様々な裏付けがあって、現在の「自分」が理解できるということを講義を通して学ぶという流れが見えてくる。

基礎の部分は、学生の「心」の学問に対する期待とは異なってしまいう傾向にあるが、科学的であることを学ぶことによって、確かな考察が生まれることもわかった。理論的な裏付けをもって事象を理解していくことを学ぶ場としていく役割もある。

また、青年期にある学生は、自分をさらに一歩前進させるために意識した取り組みが必要であることも気づいていかなければならない。小学・中学・高校の学校教育の中で、思春期から青年期の自分の発達的特徴について学び、対応の仕方についても考える機会が与えられているが、本当に「自己」の問題に対峙し、乗り越える作業をほとんどのものは終えていないし、立ち向かっていかない。高校までの心理学に関わる事柄の学習が、どの程度学生の中に浸透しているかについて言及することはできないが、少なくとも一度触れたことのある内容であることを踏まえなければならない。既習の知識があることを自覚させ、それらを活用しながら直面している問題を、理論的に解釈しながら自分の中で消化していくことが必要であり、そのための示唆を与える講義を用意しなければならない。特に、「心の問題」に出会ったときに、どのように取り組むのかということを知るための臨床心理学の知見は、従来、専門科目の中で扱われることはあっても、入門の段階ではこの領域は扱われることはなかった。しかし、社会状況の変化の中、「心の問題」への向かい合い方を教養として身につけておくべき点とされる傾向にあることも明らかになった。

## おわりに

学生との相互関係の中で、講義あるいは演習の授業は成り立っていく。しかし、授業の内容は、その分野の研究の進展のみに左右されるものではなく、社会の状況、学生の中に積み上げられているものなど様々な要因が関わっている。この多様な要因を考慮することなく、伝える側の価値観や使命感のみで選択された内容が先行してはいなかったかを省みるために、この検

討を試みた。今後の授業のための小さな指針を得ることはできたが、一人ひとりの生涯発達を視野に入れ、また、生涯学習につながる学びを提供する内容を吟味するところまでは到達できていない。今後の課題として取り組んでいきたい。

#### 参考文献

- 阿部芳甫. (1960). 心理学 東京：誠信書房.
- 青木民雄・内藤徹 (編) (1998) 心理学要論 東京：福村出版.
- 藤本忠明・栗田喜勝・瀬島美保子・橋本尚子・東正訓 (1993) ワークショップ心理学. 京都：ナカニシヤ出版
- 舟津孝行 (編). (1992). 心理学：人間行動の理解. 京都：ナカニシヤ出版
- 原岡一馬・河合伊六・黒田輝彦 (編) (1979) 心理学：人間行動の科学 京都：ナカニシヤ出版.
- 原岡一馬 (編). (1986) 心理学概論 京都：ナカニシヤ出版.
- 長谷川寿一・東條正城・大島尚・丹羽義彦 (1999) はじめて出会う心理学 東京：有斐閣
- 伊吹山太郎 (監)・秋田宗平・島久洋・杉田千鶴子 (編) (1994). 現代の心理学：研究の動向と展開 東京：有斐閣.
- 稲田準子・細田和雅・松本卓三. (1991). 心理学概説：認知・発達・社会・産業 京都：ナカニシヤ出版.
- 糸魚川直祐・春木豊 (編) (1989). 心理学の基礎. 東京：有斐閣
- 加知ひろ子・祐宗省三・D Shwalb・小林小夜子・田中幸代・小川内哲生・原野明子 (1999). 日本の大学における心理学担当者を対象とする授業調査研究(1), 日本心理学会第63回大会発表論文集, 984
- 神谷育司 (編) (1988) 心理学：人間理解の方法序説. 東京：福村出版
- 金子隆芳 (編) (1982). 現代心理学要論 東京：教育出版
- 加藤厚. (1983) 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31(4), 20-29
- 丸野俊一・針塚進・宮崎清孝・坂元章. (1994) 心理学の世界 東京：有斐閣
- 丸山欣哉 (編). (1996) 基礎心理学通論 東京：福村出版
- 松井洋・田島信元 (編). (1988). 心理学の探求 88 東京：ブレーン出版.
- 名城嗣明・東江平之 (編). (1986) 初めて学ぶ心理学. 東京：福村出版.
- 無藤隆・荳阪直行・倉光修. (1994) 心理学とは何だろうか. 東京：新曜社.
- 長尾勲. (1989) 心理学を学ぶ 京都：ナカニシヤ出版
- 永沢幸七. (1982) 人間性の心理学. 東京：教育出版.
- 西昭夫・國分康孝・山中祥男・菅沼憲治 (編) (1984) 心理学：Theory & Exercise 東京：福村出版
- 野口薫・辻敬一郎・糸魚川直祐・青木孝悦・伊藤隆二・萩原滋. (1990) 心理学入門 東京：有斐閣
- 岡田督 (1993). 心理学：理論とその応用. 京都：ナカニシヤ出版
- 岡本栄一・西村秀雄・福屋武人・本間道子・森上史朗 (1983) こころの世界：図説心理学入門 東京：新曜社
- 大山正・詫摩武俊 (編). (1973) 心理学通論 東京：新曜社
- 大山正・詫摩武俊・中島力. (1993). 心理学 東京：有斐閣
- 大村政男・岡村浩志・清水敦彦・常盤満 (1980) 心理学概論. 東京：福村出版
- 笹野完二 (編). (1993) 心理学：こころを科学する 京都：ナカニシヤ出版
- 関忠文・大村政男 (監)・岡村一成 (編). (1997) NEW 心理学アスペクト 東京：福村出版
- 柴山茂夫・林文俊・河合優年 (1987) 心理学アラカルト 30. 東京：福村出版
- 隈江月晴・田中宏二・高橋正臣・長尾勲 (1984). 心理学：基礎と展開 京都：ナカニシヤ出版
- 鈴木清 (1981) 心理学：経験と行動の科学 京都：ナカニシヤ出版
- 田島信元・田島啓子・清水弘司 (編). (1987) 現代心理学のすすめ 東京：福村出版
- 詫摩武俊 (編) (1990) 心理学 東京：新曜社
- 辰野千寿 (編) (1999) 心理学：第2版. 東京：日本文化科学社.
- 和気典二・片桐雅義・高橋晃・花田安弘・和気洋美・大島尚・稲木哲郎・高井清子・戸田弘二. (1991) 心理学アップデート. 東京：福村出版.
- 渡辺浪二・角山剛・小西啓史・三星宗雄 (編) (1987) 心理学入門 東京：ブレーン出版
- 矢田部達郎 (監) (1962) 心理学初歩：三訂版. 東京：培風館
- 付記：「心理学に対するイメージ」調査資料は、名古屋女子大学田畑洋子教授より提供して頂いた。